

114「ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。
 115兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。
 116「ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。
 117兵十のかけぼうしをふみふみ行きました。

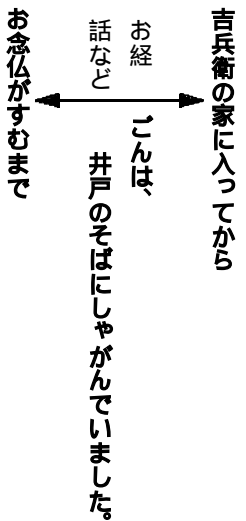
114「ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。

「お念仏が——すむまで」
 井戸のそばに
 ごんは——しゃがんでいました。

お念仏 既出
 まで 既出

「ごんは、兵十が入ってから、ずっと井戸のそばにしゃがんでいた。けっして短い時間ではなかっただろう。そこまでして待つごんの気持ちがある。」

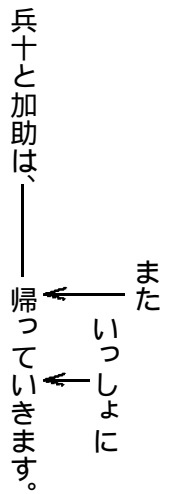
まずわかることは？
 ・ごんはしゃがんでいました。
 ・どこにかというところ、井戸のそばにです。
 ・もっぴとつ文があるよ。
 ・お念仏がすむまで
 それは、何を表している？
 ・時間
 「〜まで」「〜といふんだから、」から「〜という始まりがあるよね。それは、いつから？」



しゃがむ
 ひざを折り姿勢を低くする。しつこくする。
 腰を落とし、ひざを曲げ、尻(シリ)を下げ
 たかっ(こつ)をする。

・兵十と加助が吉兵衛の家に入ってから。
 そうだね。こつこつことになる。「板書」
 とこころで、お念仏がすむまでというところになるときまでなんだらっ。
 ・村の人たちが、出てくるまでだと思っ。
 そうだろうね。この間の時間ってどつどつ、けっこつ長い。
 ・お経とかお坊さんの話って長いよ。
 ・それに、村の人の話もある。
 そうだね。短い時間じゃない。
 その間、ごんはどうしていたかというところ。
 ・ごんは、井戸のそばにしゃがんでいた。
 前の場面で、同じ文がでてきたよね。そこからずっとしゃがんでいたんだ。
 これまでのごんというのは、こつこつやってじつとしていることはあまりなかったよね。最初の雨の続いたときだっ……。
 ・早く出たいと思っっていた。
 とこころがこころでは、ずっとしゃがんでいたんだ。こんは、どつこつこつこつ気持でしゃがんでいたんだらっ。
 ・早く終わらないかなあと思っっていた。
 ・兵十と加助の話のつづきが気になっていた。

115 兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。



また 既出
 再び。もう一度。更に。「又・復」「い
 ずれ 伺います」 同じく。やはり。「又・亦」

「それも よからう」「これ」も 傑作だ」
 遠のき態 既出
 すきなひの表現 既出

・すぐくつづきを聞きたいと思ってた。そうだね。これまでのごんとはちょっと違う。それくらい、兵十と加助の話が気になってしかたなかったんだね。

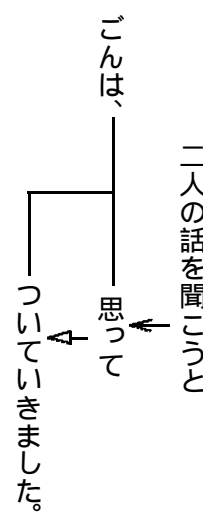
兵十が帰っていくのを確認するごん。たくさんの村人がいただろう。月夜とはいえ、見えづらい夜の中で、二人を確認したということは、出てくる村人達をじっと見ている(兵十をさがしている)ごんの姿がある。

まずわかることは？
 ・兵十と加助は、帰っていきます。
 ・帰っていくようすは、またいっしょにです。
 ・「帰っていきます」と、すきなひのずで書いてあるね。
 ・ごんの目で見ている。
 ・ごんになりきっている。
 そうだ。じゃあ、ごんになって、この光景を頭に描いてみてよ。「またいっしょに」というのは？

・来たときと同じ。
 そうだね。ところで、ここに来たときは、兵十と加助だけだったよね。ところが、お念仏の終わった今は？
 ・村の人がたくさん出てきている。
 そうだ。しかも今は？
 ・夜。
 ・さあ、そいつとごんから、ごんの目で見るとだよ。
 ・ごんは、出てくる村人をじっと見ている。
 ・兵十はまだかなあと思っで見ている。
 ・薄暗くてはつきり見えないけど、兵十の姿はすぐわかった。
 ・どこからそんなことがわかるの？
 ・だって、今までずっと兵十のことばかり見てきているから。

なるほど。
 いずれにしても、ごんは、注意して兵十が出てくるのを探してたんだらうね。そしたら、来たときと同じように……。
 ・加助といっしょに帰っていった。
 ・「帰っていきます」だね。今まででも出てきたよ。

116
 ごんは、二人の話を聞こうと思って、
 ついていきました。



・ごんから見ても、遠ざかっている。
 ・ごんは井戸のそばにしゃがんだままで、兵十と加助はそこから向こうに向かって歩いていく。
 ・ごんは、帰っていく後ろ姿を見ている。
 ・まだ、ほかの村人がいたりするから、すぐは動けないんだけど、また一人で帰っていつているなと思っ
 ている。
 そうだね。井戸のところで、しっかりと兵十と加助
 を見ているんだ。

ごんが井戸のそばにずっとしゃがんで待っていた理由
 がここで明確になる。ただ、どんな話に興味があったの
 かは書いてない。

まずわかることは？
 ・ごんは、思っ。
 ・思ったなかみは、二人の話を聞こうとです。
 ・ごんは、ついていきました。
 つまり、ここまで待っていた気持ちもはっきりした
 ね。
 ・やっぱり二人の話が聞きたかったんだ。
 ・うんと気になっていた。

中止形 既出

この場合は、理由。

そうだね。ごんは、二人の話の何が聞きたかったん
 だろっね。
 ・自分のことが出てくるかなあと期待してる。
 ・みつきは、変なこともあるもんだなあ、で終わって
 るので、そのつづきが聞きたい。
 フリートーク (答えを求めない)
 そして、ごんは・・・？
 ・ついていきました。
 さつきは、「」つけていきました、「だったね。今度は
 」ついていきました「だ。どっちがっ..
 ・つけていくといつのは、「」そりから見つからないよ
 うに履行することだけど、ついていくといったら、
 見つからないようにとかは関係ない。
 ・ただ、後ろをついていく。
 ・でも、見つからないように気をつけているんじゃない
 かなあ。
 そうだね。つけていくといつのは違っけど、その
 よつすは同じかもしれないね。でも、もしかしたら、
 気持ちは違っているのかもしれないよ。

ふみふみ いきました。
ふみながら いきました。

どんな感じがしますか？

「ふみふみ」というほうが、一步一步ていねいにふんでいるような感じがする。

「ふみながら」は、すすつとふんでいる感じ。こつちのほうが、ついでの動きっていう感じが強い。

そうだね。絵にすれば同じなんだけど、「ふみふみ」のほつがしっかりふんでいるような感じがするかもしれないね。

これは、ごんの気持ちがありそつだ。

ごんの気持ちを考えてみてごらん。

ごんは、兵十の近くにいたい。

兵十に姿を見せたいけど、それはできないから、せめてかけとだけでもいっしょにいたい。

こつそり兵十のそばにいたいんだ。

うん。かけほつしをふんでいるということは、ごんは兵十の近くにいるということだね。これって・・・？

すごく危険。

見つかるかもしれないよ。

そつだよね。前ときには、加助が振り向いたただけでびくつとして、びくくりしたんだよね。なのに、今は、兵十のかけほつしをふみふみいつているんだ。話を聞くだけだったら・・・？

もつ少し離れてもいい。

そんな危険を冒してまでごんは兵十のかけほつしをふみふみいつているんだ。つまり、それくらいごんは・・・。

兵十のそばにいたい。

兵十と一緒にいたい。

兵十のことが好きなんだよ。

そつだね。ごんの気持ちは、とても兵十の方に向いているんだ。でも、姿を現すことはできない。

さて、この文、ちゃんと絵になるかな？

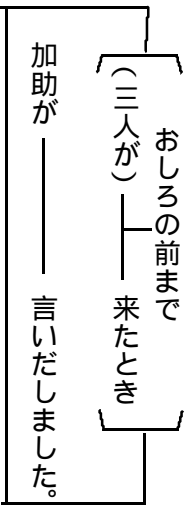
どこに月があつて、かけがどうなっているのかも考えて、頭の中に絵をかいてごらん。うかんできましたか？

どんな絵が頭に描けたか、発表させてもいい。

120 119 118
 「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」
 「えっ？」
 と、兵十はびつくりして、加助の顔を見ました。
 121 「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ。神様が、
 おまえがたった一人になったのを、あわれに思わしゃって、いろんな物をめぐんでくださ
 るんだよ。」
 「そうかなあ。」
 122 「そつだとも。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」
 「うん。」
 123 「ごんは、へえ、こいつはつまらないな。」と思いました。
 124 「おれが、くりやまつたけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様
 125 「お礼を言うんじゃないあ、おれは引き合わないなあ。」

118 おしろの前まで来たとき、加助が言
 いただきました。

兵十と加助は、吉兵衛の家を出てからずっとだまっ
 ていた(他の話をしていた?)。お城の前というのは、
 この夜、ごんが二人に出会った場所。そこまで、か
 んじんの話が出ないあとを、ごんはずっと兵十のか
 げぼつしをふみふみついてきた。そこで、やっと加



来る

「行く。」
 「食事をして(か)か(か)」「歩いて」「歩いて」
 「ここに至る、届く。」「いつか来た町」「手紙が」「中村から
 連絡が」「。」「こちらに通ずる。」「山村に電灯がきた」「…
 時がめぐって、近づく。」「春が」「チャンスが」「。」「多
 くは」「た」が付いて《その時になる。》「出発の日がきた」
 「法案は詰めにきている」「」がたのきた機械」

「この場所は、自分のほうに近いくとこより、近づ
 いてこに至る、とこいう意味だろ。映像的にいえば、
 場面としてお城の前が設定され、そこに登場したとこら
 えればいい。」

助が言いました。

静かな月夜。三人の気持ちがあつくりと流れている。
 (ごんの心は、はやっているのかもしれないが。)

- まずわかることは？二つのが書いてあるよ。
- おしろの前まで来たとき、で切れます。
- 来たのは、三人です。
- そのとき、加助が言いました。
- おしろのまえまで来たとき、というのは、時だね。
- うん。

おしろの前っていったら、前にもでてきたような？
 ・ごんが兵十たちとあったのが、おしろの近くでした。
 ・中山様のおしろの下を通って、少し行くと、細い
 道の向うから、だれかくるようです。」と書いてあ
 ります。

- ということは、三人はずいぶん帰ってきてるんだ。
- そこで、加助が言いました。「言いました」
- といつんだから・・・?
- ここで言い始めた。
- じゃあ、ここまではしゃべってないんだ。
- おしろの前までは、ずっとだまって歩いてきた。
- べつと、そのようだね。

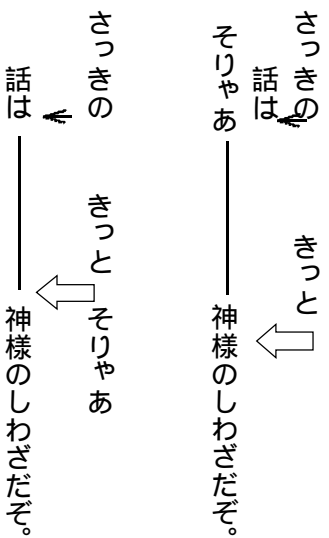
しだす 局面動詞？

運動の過程の部分となる動作や変化をあらわす文法的
あわせ動詞。

「しはじめる」「こつこつける」「ごおむる」

「しだす」「は、」「しはじめる」と同じと考えればいい。

119 「さっきの話は、きくと、そりゃあ、
神様のしわざだぞ。」



題目語

【文法】 題目語は、さしだしの機能をもつ文の部分で
あり、文の内容的なくみたてにも参加しているが、述
語との関係が直接的でないものである。

あとのことは 弁護士も力をそえる

エサは リンゴをもっていった

題目語のしめすモノが あとの文の部分のなかでおな

とるで、その間「んはどつだったんだろつ？」

・ずっと、兵十のかげぼうしをふみふみ歩いてた。

・それはおかしいよ。道は曲がったりするから、かげ
がいつも後ろにできるわけじゃないもの。

・兵十の後ろについて歩いていたのは同じだと思う。

・早く話をしないかなあと思ってた。

・兵十の近くにずっといるわけだから、けっこうしあ
わせだったりして……。

いろいろ考えられるけど、たぶん、兵十のすぐ後ろ
をついてきたのは確かだろつね。そして、何を話す
だろつと、耳を澄ませていたんだ。

そんな時に、加助が話し始めた。兵十ではなく。

加助は、ずっと考えていたようだ。兵十の話を真剣
に聞いていたのだ。
そして、考えた末に、神様のしわざにちがいないと
結論つけた。それほど「へんな」話だった。この村で
は、そういうことをする人間が思い当たらなかったの
だろつ。

加助の言ったことだね。何について言っているの？

・さっきの話について。

・さっきの話とこの話は？

・兵十が言った話。

・だれだか知らないけど、くりやまつたけを毎日毎日
くれるという話。

そうだね。その話を言いたしたんだ。

二人は、お念仏に行く途中からずっとだまっていた
んだよね。ということは、加助はその間どうだった
ということがわかる？

・兵十の話を聞いて、ずっと考えていた。

・そんなことをするのはだれだろつと、考えていた。

・兵十の話を信じて、そのなかみを考えていたんだ。

加助は、兵十の話を聞いて、最後にはどう言ったか

じ単語や同類の単語 または「これ」「それ」「この」「その」などでくりかえされているものがある。

サルは 屋久島のサルをつかった
順序は もちろん 会のときの順序にしたがいたい
諸般の問題は いちおう これを検討せねばならぬ
八ダカのかたちで題目語になって それを「これ」「それ」「この」「その」などでうけるものがある

あたらしい生涯 それが連太郎には偶然の身の
つまりきから ひらけた ものである

自業自得

そんなことはもかれはいった

「注」この種の題目語は「提示語」とよばれてきた。

きつと 陳述副詞

既出

「^{副詞}きつと」話し手が聞き手より強く認識を要する語。
必ず。「彼は来る」「忘れたらごめん」「きつと、き
まつて。」「上京のたびに 寄る」「話し手の断乎（だん
こ）とした気持を表す語。間違ひなく。たしかに。」「申
じつけたぞ」「〜」は「急度」「屹度」と書いた。
きびしい、またけわしい気持を表した顔つきになるさ
ま。」「なる」「にらみつける」

しわざ 言葉

「^{副詞}しわざ」人がする行い。ふるまい。また、実際にした行為。
「ひどい」だ

（自分にとって）よく（思わしく）ない結果を招く 相
手や第三者の行為。

用例・作例

みんなきさまの「しわざ」だ

あいつの「しわざ」無二

ぞ 終助辞

既出

話し手のほうが聞き手より強く認識している情報を聞
き手に伝えて、聞き手に注意をうながす文に使われる。
「ぞ」「は」話し手が相手の認識を高める必要を感じて
発言するときに使われる点で、「や」「と」共通である。しか
し、「ぞ」「は」が使われるのは、相手に、その認識によって何
らかの行為をすることを期待する発言の場合であって、
相手への「しわざ」より強二。

「しわざ」？

・へえ、変なこともあるもんだなあ。

変なことだと思った。でも、そのことを真剣に考え
ていたんだね。

そして、加助が思ったのは？

・神様のしわざだ。

・くりやまつたけなどをもってきてくれるのは、神様
だと思った。

そう。しわざというのは、だれかのしたことなんだ
けど、どちらかと「しわざ」とよくないことに使った。

「これ、だれのしわざだ！」「なんてね。

でも、「この場合は、よくないことなのかな。

・うん、くりやまつたけをもってきてくれるんだか
ら、「しわざ」。

でも、兵十にとってみたら、気持ち悪いよ。だれか
わらないんだから。

そうだね。くりやまつたけをくれるというのは悪い
ことじゃないけど、正体がわからないというのは気
持のいいものじゃない。だから加助はなんて言っ
たか「しわざ」。

・変な「しわざ」。

そう思っているから、しわざだ、というふうに言っ

たんだろうね。しかも、そのしわざはだれのかとい
うと？

・神様。

神様がやっていることだと、加助は考えたんだね。

それも、「きつと」って言ってるよ。「きつと」「とい

っているんだから、加助は「しわざ」？

・絶対そうだと思っている。

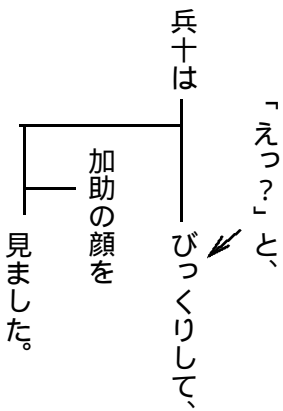
・間違いないと思っている。

そうだね。加助が想像していることだけど、加助は
間違ひなく神様のしわざだと思っているんだね。

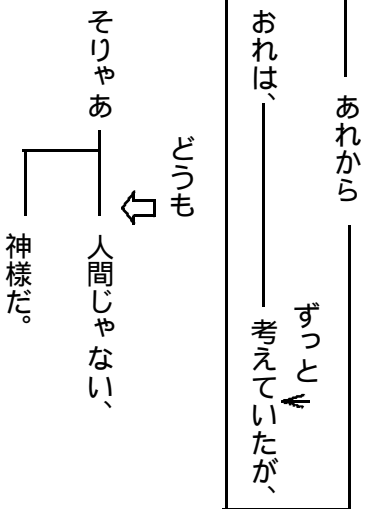
そんなことを、ずっとだまって歩いてきたときに、
急に言い出したんだ。

そんな「しわざ」急に言われた兵十は、どう思ったんだ
ろ。兵十のほうを読んでみよう。

120 「えっ？」
と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。



121 「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ。神様が、おまえがたった一人になったのを、あわれに思わしやうって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」



加助のことばに、兵十はびっくりした。兵十が思ってもいかなかったなみだった。思わず加助の顔を見ずにはおれない兵十。

二つのことがあるね。

・兵十は、びっくりしました、

・兵十は、見ました。

・びっくりしたようすは、「えっ？」と、です。

・見たのは、加助の顔です。

まず、「えっ？」と、びっくりしたんだ。

「？」がついているね。

・加助の言っていることがよくわからなかった。

・何言ってるの？という感じだった。

・思ってもいないことをいわれた。

うん。びっくりしたんだ。

そして、加助の顔を見た。これは、どういいう気持ち？

・神様だなんて、冗談だろ、といいう気持ち。

・こいうことって、みんなにもあるんじゃないかな。

・自分が思ってもいなかったことを相手が言ったとき、

・思わず、相手の顔を見るっていうこと。

・このときの兵十も、そんな気持ちだったんだらうね。

神様のしわざだと言った加助。これでは、あまりに説明不足だ。兵十のことばが出る前に、どうしてそう考えたかを説明し始めた。

お念仏の影響がなかったとはいえないだろう。しかし、加助はまじめに言っている。

兵十が「えっ？」と言つてすぐに加助はしゃべっているね。わかることは？

・兵十がびっくりしたから。

・兵十が、なんのこと？みたいな顔をしたから、何が言いたいかすぐつけくわえた。

・そうだね。「神様のしわざだ」なんて急に言われたら、なんのことかわからないものね。それで、加助は説明を続けたんだ。

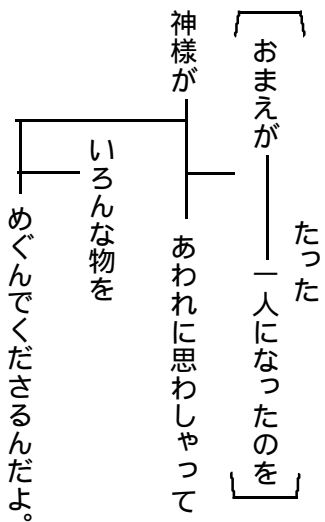
・さて、最初のせりふ、言っているなかが二つあるけれど、何々？

・おれはかんがえていたが、と、そりゃあ、神様だ、です。

・そりゃあ、人間じゃない、といいうのもあります。

・いいね。では、はじめのほうからわかることは？

・あれから、といいうのは、兵十に話を聞いてからだと思えます。



すつ

【副】 はなはだしい開きがあるさま。段違いに。はるかに。「彼の方がえらい」「昔」「初めから、または長い間続けて。」「立ち通しだ」「ためらわずに通るさま。すかと。すいと。」

「が・じくじがい 既出

【文法】

くいちがうふたつのことをならべる

- ・ 日は くれたが、だれも かえって こない。
- ・ かれは よく あそんだが、彼女は もっと

よく あそんだ。

先行節が前提をあらわす。

・ きのう みんなで山へのほったが、わたしはとちゅうでらくした。

・ さつきかかれに きいたが そんなことはなかったよ。うだ。

【ソノダの文脈的な用法 既出

はなし手すすぐまえにいったことや、これからいうことは、ソ系であらわす。きき手がすすぐまえにいったことや、はなし手すすぐまえにいったことで、きき手によく理解されたとおもわれることは、ソ系であらわす。また、話のはじまる以前から、はなし手ときき手に、おなじように、よくしられていることなどをさすときには、ア系をつかう。

あわれ あはれ

【副】 哀れ・×憐れ 【名・タナ】 かわいそうだと

思つ心。ふびん。また、同情を引くこと。「」を催す「

【哀れ】 「名・タナ」人の心を強く打つような感動。しみじみとした情趣。「物の」を解する人「 感動して発する「あ、はれ」から出た語か。

「変なこともあるもんだなあ。」と言って、だまってからだと思えます。

・ すつとだから、歩いているときも、念仏の時も考えていたと思えます。

・ 加助は、兵十が言ったことを真剣に聞いて、考えていたと言つことがわかります。

・ そうだね。加助は、兵十から話を聞いてからずっと考えていたんだ。それだけ一生懸命考えたと言つことだろうね。

・ そして、その次に言ったことからわかることは？

・ くりやまつたけをもつてきてくれるのは、人間じゃなくて、神様だと言っています。

・ 一生懸命考えれば考えるほど、だれか人がしているというの、考えられない。

・ お念仏があつたから、神様じゃないかなあと思ったんじゃないの？

・ いずれにしても、加助がずっと考えて出した結論が、神様のしわざということなんだね。

・ では、次のことばでわかることは？ちよつとややしい言い方をしているの、ていねいに読んでみるよ。

・ だれがどうしたと言っているの？

・ 神様が、めぐんでくださるんだよ。

・ 神様が、あわれにおもわしゃって。

・ うん。神様のことを言っているんだね。まず、神様が、あわれにおもわしゃって、これは、ていねいな言い方で、思われてとか、お思いになつてというのと、だいたい同じだ。あわれに思つて、どういう気持ち？

・ かわいそうだなあと思つている。

・ かわいそう、という気持ちなんだ。ただ、みんながよく使つかわいそうとは、ちよつと違つかもしれない。ほかのむずかしい言い方でね、不憫ともいうんだ。相手に同情している気持ちがあるんだ。

・ さて、何をあわれに思つたというのだろう？

・ 兵十。

・ 兵十をあわれに思つて、と言つている？

・ おまえがたつた一人になつたのを。

・ そうだね。兵十がたつた一人になつたことをあわれに思つていると言つているんだ。

・ これ、神様がそう思つていると加助は言っているのだけど、本当はどつなんだらう？

・ そんなことはわからない。

・ 加助がそう思つているから、こんなことを言つてい

派生”さ”げ”がる*

めぐむ 贈む・×抽む

【辞】「五他」情けをかける。ア、慈愛の心をかける。

恩恵を与える。「まれた生活」「資源に「まれている」

現在では、普通、受身の形で使つ。イ、施し物をす

る。あわれに思つて金銭や品物を与える。「人に金を「

る。

・加助が、ひとりぼっちになった兵十をかわいそうだなあと思っているんじゃないの。

神様が、といいながら、ほんとは加助が思っていることなのかもしれないね。兵十がたった一人になったのが、かわいそうでならないんだらうね。

で、次に言っていることは？

・神様がめぐんでくださる。

・いろいろな物をめぐんでくださる。

めぐむというのは、どついつのこと？

・あわれに思つて、お金や品物をあたえること。

やはり、かわいそうだという気持ちがあるんだ。

こここの加助のせりふ全体で、ほかにわかることない？

・加助は、完全に神様がしたことだと思っている。

・加助は、兵十のことが好きだから、こんなふうに言つたんじゃないのかな。

加助の気持ちも、いろいろわかってくるね。

122 「そうかなあ。」

そうかなあ。

加助の自信のあることばに対し、兵十は臍に落ちない。生半可な返事を返すしかない。

神様というのは、あまりに突飛なのだ。

加助のことばに、兵十は、そうかなあとしか言っていないね。どついつ気持ちなんだろう？

・信じられない。

・加助が言っていることが納得できない。

・

・なんか、念仏に行くときと反対になっている。

うん。

加助のことばに納得したわけではないが、ほかに考えられることもなく、生半可な同意をするしかなかった。また、神様にお礼を言つといつのは、拒否するよ
うなことでもなかっただろう。

加助のことばに対して、兵十の返事は？

・うん。

どついう気持ちで言ったんだらうね。前は、「そんなあめ」と言つてるんだみ。

・なんか、すつきりしないけど、言い返せない。

・加助の言っていることを全部信じるわけじゃないけど、まあいいか、みたいな感じで。

言い方はどうだと思つ？

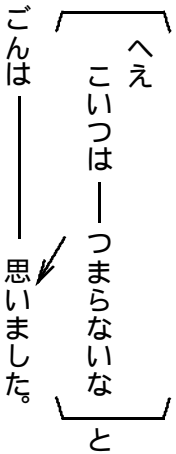
・小さな声で言っていると思つ。

・はつきりしないような言い方。

実際に言ってみてくらん。

* 加助のことばに続けて言わせてみる。

125 ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と思いました。



へえ

【辞】(感)

(1) 驚いたり、感心したり、疑ったりした時にいう言葉。彼が結婚したとねえ」「、本当かね」

(2) (主に関西地方で女性が) 応答・承諾などに用いる語。「おおねに」

【ひびく】

【辞】(代)「こやつ」の転

(1) 三人称。その場にいる人をののしったり、また親愛の気持ちからぞんざいという場合などに用いる。この人。「が犯

二人の話は、神様にお礼を言つといふことになった。どついう話になるだらうと、興味津々で(期待して)聞いていたごんは、意外な結論に驚き、これではつまらないと思つた。

まずわかることは？

・ごんは、思いました。

・思ったなかみは、「へえ、こいつはつまらないな。」です。

加助と兵十のやりとりを聞いていて、ごんが思ったことだね。では、思ったなかみについて考えよう。

へえ、というのは、どついうときに言つ？

・びっくりしたとき。

・すごいなあと思つたりするときも使つ。

「ここではどうなんだらう？」

・ごんが思つてもいない話になったので、びっくりしている。

・すじくびくびくしてゐるって言つんじやなくて、軽く驚いてごん。

そつだね。ちよつとびっくりしたんだ。そして、どつ思ったかといつ？

・こいつはつまらないな、と思つた。

人です」「、思ったより手ごわいな

(2) 近称の指示代名詞。その場にある物や事柄を指し示す。これ。「この物」「は、うまこ」「は、面白こ」

【辞】 つまらぬ、つまらない

【辞】(連語)(動詞)「詰まる」の未然形に助動詞「ない」の付いたもの。「つまらぬ」「つまらな」「つまんない」の形も用いられる

(1) 満足感がなくてさびしい。心が楽しくない。「話し相手がない」

(2) 興味がもてない。おもしろくない。「ない小説」

(3) とりあげるだけの価値がない。取るに足りない。「つまない」

「ないものですが、召し上がって下さい」「ないつわぬ」

(4) ばかばかしい。不利益だ。「盗まれてはない」

(5) 得るところが少ない。するかいがない。「ないやせ我慢をしたものだ」

「派生」 なげ(形動) なげ(名)

本文の場合は(2)か(3)だと思われるが、子どもたちの世界で

は、ほとんどが(1)(2)の意味で使われているだろうから、

ほかの意味も教えておく価値があるだろう。

「いつって？」

・まつたけとかをもっといつているのが、神様だといふこと。

・神様にお礼を言いつ。

そつ。そのことがつまらないと言っている。つまらないといつのは、どつどついつ気持ち。

・おもしろくない。

・楽しくない。

・どびついときにも言つ。

そつだね。ふつつは、おもしろくないいつときに使つちね。じゃあ、この場合は、

・神様がしていることになったのが、おもしろくない。

・神様にお礼を言つことになったのが、おもしろくない。

い。

なるほど。それでもいいみたいだ。

でも、ほかに、「つまらない」の意味があるんだ。

参考までに考えてみて。

ア、こんなことで、先生にじかられたのはつまらない。

イ、お母さんとつまらないけんかをしたものだ。

アはね、ばかばかしいという気持ちがある。

イは、するかいがない、やってもいいことがないとい

う気持ちがあるんだ。

ごんの気持ちに、これに似たものはないかな？

・イのほうで、近いような気がする。

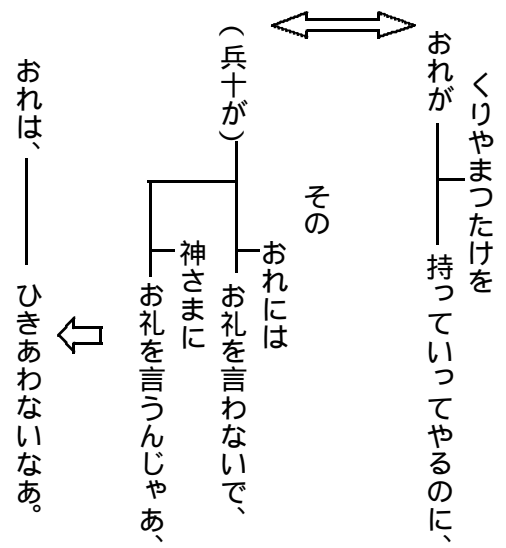
・ばかばかしいという気持ちもあると思うよ。

そつだね。つまらない、といつのは、ただおもしろくないというだけじゃないんだ。よくにているいる

んな気持ちがあるんだ。ごんの気持ちも、そんな気

持ちが混じった感じかもしれないね。

126 「おれが、くりやまつたけを持っていてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」



結局、神様にお礼を言うということになって、不服を感じているごん。これでは、栗や松茸をもっていく価値はないと感じているのだが……。「おれが持って行ってやってる」という言葉から、「ここでは、すでに「つくない」という意味は薄れていることがわかる。本心は、次章の冒頭を読むことで考える必要がある。

「」がついているけど、これは話したこと？
「つくない」の気持ち。
声に出して言っているわけではないんだね。
前の、「へえ、つくないならいいな。」のつづきだ。
いろんなことを言っているよ。最初から、ていねいに読んでいこう。

まず、一番はじめ。だれがどうだと言っているの？
「おれが、くりやまつたけを持って行ってやる。何がわかる？」
「おれが、持っていている。神様じゃないぞと言っている。」
そうだよ。そして、もって行ってやる、と言っているね。これで、何かわかることはない？今までもできた言い方だ。

…つやめ つやまつ 既出

のじ

辞 「接続助詞」に「の」前に準体助詞「の」が挿入されてできたもの。近世以降の語。活用語の連体形に接続する。形容動詞型活用の場合、終止形に接続することもある。

(1) 既定の逆接条件を表す。意味内容の対立する二つの事柄を、意外・不服の気持ちを含めてつなぐ。「昔は静かだった、今は自動車の洪水だ」「一生懸命勉強した、だれもほめてくれない」「もつすっかり丈夫な（だ）、旅行を許してくれない」また、「とこのに」「いいのに」の形で慣用的に用いられることもある。「正月だといっ、晴れ着も作れない」「よせはいい、無理するからやめ」

(2) 逆接的な意味がほとんどなく、ただ二つの事柄をつらねて言い表す場合に用いられることもある。「併しお前は上品だ肌目が細かいから、汗なんぞをおかきではないな人情本・英対談語」

(終助)「」における、前件に対する後件が省略されたもの
(1) 意外な結果に対する、恨み・不服の気持ちを表す。「欲しいと言えは、買ってあげた」「ああ、せっかく学校が休み

- ・ やりもらいの言い方です。
- ・ してやる、というのは、だれかのためにすることです。
- ・ 兵十のために、「ごんは持っていている。うん。そういうことになるね。」
- ・ とこので、「ごんが兵十にこんなことをしはじめたのは、つくない気持ちだったからかなあ。」
- ・ 兵十につぐないをしないと思っていた。
- ・ つぐないのつくない。
- ・ おかあが死んだつくない。
- ・ つぐないの気持ちだったんだ。それが、ここではしてやるになっている。
- ・ ちよつと違つ。
- ・ 何だが、えらそぶってるんじゃない。
- ・ つぐないってどういう感じじゃない。
- ・ ちよつと、気持ちが変わってる感じがするね。これは、また後で考えてみよう。

この、「」持って行ってやる「は、」の「」をつけて、次につながっている。これは、どつうつながらり方になるんだらう。

例 次の例で考えてみて。

ななめ

(2)相手の非を責め、なじる気持ちを表す。「知りませんって
言えはいい」「以前からのお知り合いでいらっしやっ
たねえ」

ひきあう あぶ 引き合う

【辞】(動)五「八四」

- (1)互いにひきあう。「綱を」
- (2)引き受けて損得がつりあう。割りにあう。また、もつけがある。「面倒だが十分」
- (3)努力する価値がある。「苦労して叱られたのでは」
- (4)取引する。約束する。「先刻内々」
- (5)可愛らしい弁才女滑稽本・藤栗毛

こっぴどいけんめい走ったのに、勝てなかった。

「こっぴどいけんめい走ったけど、勝てなかったとい
うこと。」

「じゃあ、くさくさがこっぴどいことだ。」

「すくいねえ。」の「こっぴどいのは、」けれど「が」
などと同じように「くさくさがい」「をあらわすんだ。」

でも、まったく同じじゃあないみたいだよ。今度は、
次の例で考えてみてほしい。

比較

毎日世話をしたのに、花はかれた。

毎日世話をしたけれど、花はかれた。

「」の「」のほつが、気持ちが強い感じがする。

・残念だなあという気持ちがある。

・くさくさいという気持ちもある。

「そうなんだね。」の「こっぴどいのは、」くさくさがい「
なんだけど、そこには、不満とか、期待したように
はならなくて残念だ、というような気持ちがあるん
だ。」

「」の「」の場合も、そういう気持ちがあるんだら

う。おれがくりやまつたけを持って行ってやる、と
いうこととくさくさがうこととで、不満に思うことが次
にあるんだ。それは……」

・そのおれには、お礼を言わない。

・神様にお礼を言う。

「そのおれ」となっているね。「」の「」っていうの
は、

・くりやまつたけを持って行ってやるおれ。

・実際にやっているおれ。

そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言う
と「」

・不満をもっている。

・残念だ、くさくさいと思っている。

「そのだね。」の「」と続けているから、そんな気持
ちがわかる。それを、さらに違う言い方で、ごんは
言っているね。」

・おれは引き合わないなあ。

「引き合う」「こっぴどいのは、」

・わりに合う。

・努力する価値がある。

つまり、おれは引き合わないなあ、と「こっぴどいのは、」
・おれは、割りに合わないなあ。

